

福島医大糖尿病内分泌代謝内科学講座と徳島大、神戸大の共同研究チームは、糖尿病患者の筋力低下リスクを予測する指標を発見した。2型糖尿病患者の尿中にある「タイチン」というタンパク質の一種の濃度が高まると、筋肉量・筋力・身体機能が低下する「サルコペニア」を発症しやすくなる」と突き止めた。研究成果をまとめた論文が米国の医学誌「ダイアベティスケア」に掲載された。8日、

糖尿病患者の筋力低下指標発見

福島医大など共同チーム

「尿中タイチン」濃度で予測

福島医大が発表した。

サルコペニアは、加齢や生活習慣病、がんなどの慢性疾患に伴って筋肉量・筋力・身体機能が低下する状態で、健康長寿をおびやかす症状。2016(平成28)年に疾病として認定され、サルコペニアの予防、治療の方法が模索されている。

糖尿病を罹患している人が特にサルコペニアが進行しやすいことが知られていたが、その発症を早期に

予測できる信頼性の高い指標はこれまでなかった。今回の研究で注目された尿中

タイチンは、筋線維の構造を支えるタンパク質で、筋損傷が生じると血液に放出され、尿中に排出される。これまで、筋ジストロフィーや拡張型心筋症などの疾患の指標として知られていた。研究チームは、尿中タイチン濃度が高くてサルコペニアを発症した場合、特に握力が低下すると明らかにした。